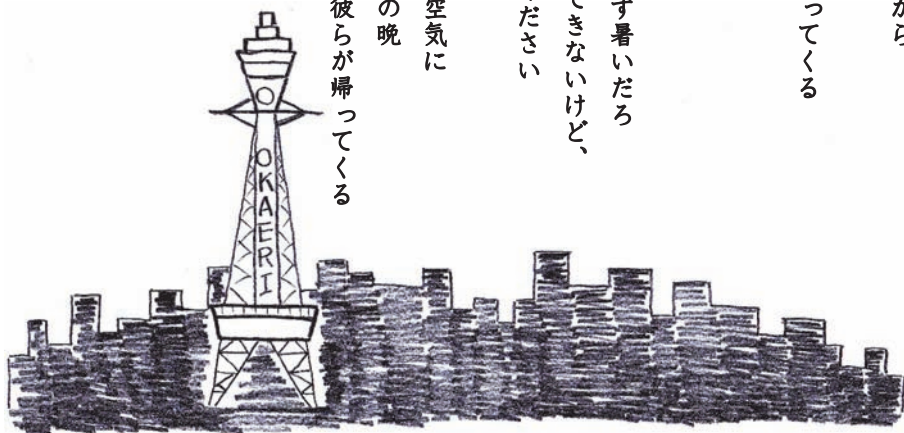




なまあたたかい空気に
つまれた八月の晩
あのなつかしい彼らが帰ってくる



のんびりしてってください
やあ、おひさしぶり
元気だったかい？
大阪の夏はあいかわらず暑いだろ
たいしたもてなしはできないけど、

名もなき彼らが
帰ってくる
暑い、暑い、と言いながら、
喉をからからにさせ、
腹をすかせた彼らが帰ってくる

とむら 吊うこと

とくしゅう

釜ヶ崎で生きること

釜ヶ崎の街に来て、ちょうど一年が過ぎた。私がこの街に来た理由はいくつかあるが、そのひとつはこの街で亡くなる人びとがいかなる人生の最期を迎えているかということが気になったからであった。人口の約8割を占め、しかもその大部分が単身者であるこの街の男性の多くは、またさまざまな事情ゆえに、故郷や家族とのつながりを断ち切って流れてきた人びとでもある。「無縁仏」という言葉を「子孫など祀り手をもたないで亡くなった者の霊」と定義するならば、彼らは間違いなく「無縁仏」となる人びとである。そのような彼らが、どのような形で死および死後を迎えるのかという問題に強い関心をもっていた。

まだ知り合いもほとんどいなかった去年の8月、私は釜ヶ崎の三角公園で開催されていた夏祭りをのぞきにいった。私はワッと声をあげた。公園の一角には、この一年間にこの街で亡くなった人びとの名前が書かれたボードが立てられていたのであった。遺影が飾られている人もいる。ボードの前には、線香をあげる祭壇が設けられており、祭りに来た人たちが手をあわせていた。なかには「この人も亡くなったんやね」などと、死者の噂話をする人もいる。私はこの光景を見て、少しほっとした。

死者を吊うためには、いろいろな方法がある。立派な墓を設け、そこに参ることも重要な方法であろうし、僧侶を呼んで年ごとに年忌供養をあげるのももちろん意味があろう。私はそれらを否定するつもりはもちろんない。しかし、もっとも大事なことは、生きている人びとが死者のことを思い出したり、死者についての話をする事だと思っている。だから、釜ヶ崎の夏祭りの風景を見た私はうれしかった。

あれから一年がたった。さまざまな人びととつきあうなかで、この街で亡くなっていく単身男性の死の迎え方や吊われ方が、必ずしも楽天的に語ってよいわけではないということもわかってきた。年老いた男性たちの多くが、自分が死んで数週間たっても発見されずにいるのではないか、たとえ葬式をあげてもらっても参列者は来ないのではないか。彼らの多くは、そのような不安にかられている。そんなことも少しずつわかってきた。この街で暮らす彼らの不安を緩和するために、私にできることは何があるのか。このことを念頭に置きながら、この街で生きていきたい。

はじめて、八月の釜ヶ崎

植田裕子

三角公園で行われた第40回釜ヶ崎夏祭り。コロシアムからは、てづくりの釜ヶ崎ねぶた・神輿とともにちんどんパレードに繰り出したり、夜の三角公園に望遠鏡を持って行って満月に近い月を見たり、原発で働く人も多いこの街の人に正確な情報をと原発の壁新聞をつくったり、若原さんという写真家が撮ったおじさんたちの「男前写真」の展示をしたり、様々なかたちで参加させていただいた。しかし、私にとってははじめての釜ヶ崎夏祭り、特に印象的だったのは、すもう大会、習字コーナー、そして慰霊祭である。

まず、すもう大会。三角公園に畳を敷き、その上の土俵で、おじさんたち（たまにわかい人も）の熱戦が繰り広げられる。200人を越える観戦者が囲み、ヤジを飛ばし、歓声を挙げる。おじさんがひとり、もうひとりと土俵に立つ。その都度その人の身なりや印象から、四股名が行司によって勝手につけられる。そして取り組み。勝負の後、勝った方は土俵に残り、次に挑戦したい人が土俵に出る勝ち抜き戦。次から次へと挑戦者が現れ、あまりの盛り上がりで終了予定時間はとうに過ぎ、そして今年最後に残ったのは、なんと御年70歳の、体もあまり大きくはないおじいさん。自らの手足を動かし、その稼ぎで食べ生きて来た、この街の人の文句無しにかっこいい姿を見させてもらうことができる。

次に、コロシアムがつくる習字コーナー。訪れる人と挨拶を交わし、思い思いの言葉を半紙に書いてもらう。書かれたものを後ろのやぐらの壁に貼って行く。それだけのシンプルなことなのだけれど、釜ヶ崎で生きることへの思いを書く人、会うことのできなくなった大切な人への手紙を書く人、帰ることのない故郷の土地の名を書く人…。字を書くことに慣れず、筆をとることをためらう人いる。ただ、どんなにおしゃ

べりなおじさんも、筆をすっととり、半紙に墨を置くその時にだけは、恐ろしいほど静かになる。筆を運ぶおじさんを前にその手元をじっと見ている間は、その静けさに圧倒される。砂埃が舞い、太陽がかんかんに照っている、そんな真夏の三角公園の真ん中に座っていることを忘れてしまう。

そして、慰霊祭である。期間中ずっと、公園内には祭壇が設けられ、この一年に釜ヶ崎で亡くなった方の名前が掲示されている。夏祭り最終日には、まず神父による祈りの言葉が捧げられ、続いて浄土真宗、浄土宗の僧侶がお経を唱える中、亡くなった方ひとりひとりの名前が読み上げられてゆく。そして、場所も時間も越えて、弱い立場にありながら、また、貧困の中で亡くなった人への言葉が述べられ、皆で想いを馳せる。祭壇の周りには黙祷を捧げる人の人だかりができ、あちらこちらからすすり泣きも聞こえる。慰霊祭を包むのは、単に死者への思いだけではない。

今、ここにいる自らの死を、生を思う人びとの思いである。釜ヶ崎では、「あすひとりで死ぬかも知れない」という言葉をよく耳にする。それはこれまでの、釜ヶ崎が背負った様々な歴史を物語る言葉でもあるのだけれど、釜ヶ崎という街は、すべての人がいつでもここにいたって本当は向き合い考えなければならぬことごとを、まっすぐ突きつけてくれる街だと感じる。

さて、そんな釜ヶ崎の夏祭り、やくざ屋さんや警察から勝ち取った祭りなのだと、終わった後に知った。もともと土地の人ではなく、労働者という立場から祭りを立ち上げるには、ただそれだけで闘わなければならなかった。その祭りがこんなに魅力的に40年続いていること、続けて来た人がいることの重みを思う。



それから

死と詩が同じ発音をもつのは、たんなる偶然ではないと思う

ことばは、すべてを背負っている
すべて。世界としかいいようのない空間
時間。生と死がくりかえされてきた
そしていまもくりかえしている この瞬間

ひとつきりの人生に、わたしたちは自身のなかに死者を持つ

ふだんはそんなことをすっかり忘れて
仕事の段取りや、ご飯の支度、恋愛の行方
帰り道の道草の仕方、くしゃみをとめる方法
どうやって死んでいくのか
一生懸命ぼんやり考えていたりする

毎年やってくる夏。
大阪の夕暮れていく墓地で
いま あなたのそばにいない大切なひとと
詩のことばで出逢う

生きることは、
出逢いなおしつづけること、かもしれない

夏風渡る墓地で
墓石の影がつくる夜のはじまりに
沈黙よりもふかい静けさで

毎年お盆月に大蓮寺の墓地で詩のワークショップを行なうようになって11年が過ぎた。実家を出てから、忙しいことを理由に帰省して墓参りに行くことはほとんどないが、「それから」と題する墓地でのワークショップをつづけている。

お経をあげ、秋田住職の法話をきき焼香をして、筆記用具をもって墓地のなかに入り、ろうそくを灯し気に入った場所に腰をおちつけ詩をつくる。半時間ほどして集合し、順番に朗読をする。あたりはだんだんと暗くなる。文字はろうそくと懐中電灯で照らされる。死んだ人の名前を呼ぶ人、泣きながら朗読する人。一生懸命生きることを誓う人もいる。

今年、東日本大震災の初盆でもある。参加した人のひとり、親代わりのようにしてもらった人がまだ行方不明のままだと話し、住職としばらく木の下にいた。「その人のことを思っているそのことが大事です。こうして話をしてくれてありがとう。」彼はなみだのなかに詩をよんだ。生きていてほしいと呼びかける。

呼びかける、ということに、詩のさいしょのあり方を思う。そしてこのワークショップは死者に呼びかけると同時に、自分の生を生きることを誓うことかもしれない、と空をみあげる。

幼いころから墓地に行くのが好きだった。シダ類の匂いのする山のなかに入り、にぎやかな親類たちと歩くのはピクニック気分だった。あるとき、にぎやかな人たちはいなくて父親と小学生のわたしは墓参りに行った。山の早い夕暮れに星がみえた。仕事が忙しくほとんど接したことのない無口な父が「あの星はお父さんのお母さんやお父さん、そのまたお母さんやお父さん、もっともつ前のお母さんやお父さんのときに発した光なんやで」と語りだしたが、それ以上は何も言わず、星のまたたきをみた。

いのちのつながりの時間のなかで人は奇跡的に生き、そしていのちをつなぐために存在をいかす、という話にはじめて「父」という存在を感じた。仕事ばかりで楽しそうにみえなかった父の人生の引き受け方にであい、こころ打たれた。今では、その山のなかの墓地はなくなった。数年前に家族会議をひらき、その近くの共同墓地に家族の墓をつくった。本の好きな一家なので、墓は本のかたちをしている。そこに一文字づつ言葉を押し、名前を並べることになった。家族はそれぞれ好きな一文字を選び、わたしは「詩」と記した。

こどもの頃、わたしが知っていた墓は、家々の墓と小学生のときの通学道にあった戦争で亡くなったという人たちの整然と並んだ墓だった。柳田国男の文章に、かつて日本には個人の墓はなく、戦争で亡くなった人たちを弔うために個人の墓がつくられるようになった、というようにくんだりを覚えている。戦争のために、数として死なねばならなかった人たち。生き残った者たちが死者を、あるいは戦争で失った何かを回復させたかったのか、と思う。ひとつひとつの墓は英霊化であり、また抽象化するものであろう。生き残った人たちは残され生きることに、どれだけの悔いをもったことだろう。終戦から66年がたち戦争の記憶に口をつぐんでいた人たちが、語り始めていると新聞で知る。口をつぐまねば生きてこれなかった重みは、並ぶ墓の影の濃さに似ている。

この10年大阪で暮らすようになり、釜ヶ崎で無縁の死に出会うようになった。わたしの見たいいくつかの葬儀は仲間に見送られる葬儀であった。簡素な葬式だった。家族や縁者はひとりもない。釜ヶ崎では仲間にも見送られずに火葬場に直行する死もあるときく。戦争に死んだわけではなかったが、ひとり死なねばならなかった人たちの死は、戦後といわれる近代の襞に折り畳まれているように思われる。

墓のなかで詩をよみ、墓のあるなしを越えて死を思う。生を思う。またたく星の光を思う。

それから、
それまでを生ききることを誓い、ちっと耳を澄ます。



3月11日に発生した地震で、川越にいた私も大きな揺れを体験した。そして、テレビでは宮城などの震源に近い地域に津波が押し寄せ、街が飲み込まれがれきの山となり、海から船が流されて家に乗り上げている様子を映像でみた。今もその衝撃は続いていて、現実として受け入れるのが難しい感覚がある。

そして、続けての東京電力福島第一原子力発電所の事故。放射能の拡散がどの程度か分からない中で、震災から4日後に小学校1年生の娘を連れて関西を訪れた。その時に立ち寄ったコクルームで、上田假奈代さんから「関東から疎開してきた親子がいる」と「ウェルフェアマンションおはな」のオーナー西口さんに紹介してもらい、しばらく滞在させてもらえることになった。埼玉からきた私たちのことを親身になって心配してもらい、本当にありがたかった。

そして滞在して3日目くらい？川越から離れて1週間ほどたった時のこと。自分が生活していた場所から遠く離れたこと、地震という大災害を経験したショックと、それでも日常が続いていくことが折り重なって、次第に精神的に圧迫される感覚になってきた。「これはあまりよくない」ということだけはわかって、ここを少し離れようと思いたち高野山に行くことにした。

なぜ高野山だったのか。行く先はいくつか考えてみたのだけれど、「どこか霊的に守られた場所にいかなくては」と感じ、以前からいつか来たかった高野山を思いついた。それは靈魂の存在を信じる、ということとはちょっと違って、ともかく落ち着いて震災で亡くなった多くの方のことを考えられる場所にきたかった。

南海電車で訪れた高野山は、大阪市街から1時間半程度で出かけられる場所とは思えないほど山深く、静逸な「聖地」だった。弘法大師が生きた時の姿で埋められていると信仰されている奥の院や、金剛峯寺を中心として、山の上部全体に寺が点在している。

高野山では、奥の院を始めとして全ての寺院が震災でなくなった方のために祈りを捧げていた。次の日には、震災被害者のための法要を執り行うことになっているらしく、山全体に参加をよびかけるアナウンスが鳴り響いている。高野山全部が、震災で亡くなった人を悼み、弔いのために読経し護摩を焚いていたのだ。

わたしは、ここで、人々のために祈ることを職能として、日々そのことに従事しながら暮らしているたくさんのお坊さんの集落があること、その山全体が聖地として信仰の対象となり、たくさんの方が訪れる場所になっていることに、心底すくわれたのだと思う。高野山には、山頂のためか、まだ雪が残って空気が冷たかったが、その冷気のある澄んだ空気の中で、やっと呼吸が出来て静かに眠ることができた。澄んだ空気の中で、やっと呼吸が出来て静かに眠ることができた。

人を弔うことの力と、その必要性を感じた初めての高野山への訪れだった。

魂を受け入れる場所

原田麻以
コクルーム
東北支局準備中

コクルームで働くようになってから、よく亡くなった方の存在を感じるようになった。

今年の1月に日本最南端の島、波照間島というところへ行ってきた。波照間島の海は美しい。旅のさいごの日、ようやく少し晴れ本格的に砂浜をあるってみた。はじめは浜に打ちあがったサンゴ礁や貝殻や流木ばかりに目が行き、それらを拾ってあるっていた。無意識にきれいな海そっちのけで、頭は下向き。うつむいた視界の中に、おもちゃのガチャガチャの容器のようなプラスチックの丸い透明のうす水色をしたゴミが入ってきた。浜にコロんとあつたそのうす水色の球体には、貝のようなものがくっついて生きていた。きれいだなと思ってカメラを向けようと、浜に座った。夢中でカメラをいじっていると、透明の球の先に海が見えた。ぺったり

求職

こころぎ
てししま
ふは
信重

毎日酔う
とあうせ
に

も座った砂の上で、カメラを置いて海を眺めることになった。波照間島の海の色は水色。本当に美しい海の前から、なにかがこちらにやってきた。涙が流れて止まらなくなり、悲しみが体のどこかから湧いて湧いてしょうがない。声を出してわんわん泣く。自分の頭でわかる範囲は越え、なぜか死についての想いが、体の奥から頭の方へ駆け上がっていた。釜ヶ崎で死んでいったたくさんの人の死。ひとりっきりで亡くなっていった人。もう亡くなってしまった人のとりかえせない何か。

2年間の活動期間の中で釜ヶ崎で労働者として生きた方の死をそれほど近くに感じる体験をしたわけではない。親しいおじさんたちの死に出会ったこともない。それなのに想いが、どうしようもなく体から湧いて止まらなくなった。

海の向こうから、だいじょうぶ、それ降ろしていきなさい、と言われた気がして、途方もなく泣きつづけ、なぜかあやまったり、くやしかったりした。海から帰るときには体が軽くなっていた。後から考えれば、サンゴも貝殻も流木も海からやってきた死だった。海は死と生の世界を計り知れない大きさをもってのみこみ、うけいれているように思えた。

今年の6月、宮城県に行ってきた。沿岸部の津波の被害にあった場所にも行ってきた。まちがなく、人もなく、時間が止まったようにかつての生活のにおいはあった。この場所は地盤の沈下がはげしく、もう人が帰ってくるができない。1階がすべて流されていたおうちの前に花がたむけられていた。まだ海の中に亡くなった方がたくさんいるだろうこともなんとなくわかった。これほどまでに、たくさんの死のある場所に来たことははじめてでどうしようもなく重くなった。

その日の夜体は疲れているのにねむれず、いろいろふしぎなことが起こった。

なにがしたくてあの場所へ行ったのか。行くべきでなかったのかもしれない、とも、今思う。静かに大切な人が迎えに来ることを待っている人がいるかもしれない場所だった。なんとか帰ってきてほしいと願う人の想い

のある場所でもある。失われた毎日が重ねてきた大切なものが、失われたままにある場所でもある。なにがしたくて行ったのか。と今思う。

先日、お盆前に栃木県で祖母の法事に行ってきた。栃木の祖父母の墓参りは本当にしばらくぶり。久しぶりに会う叔父や叔母と話をすると、育った足尾のまちはなしになる。祖父は足尾銅山の精錬所で働いていた。父たち兄弟は、青々とした水や、チリチリに枯れた木の葉、禿げ上がった山、黒い煙を見て育ったという。

足尾で育ったことは知っていたけれど、こういった話を聞いたのははじめてで、きっとおばあちゃんが、福島に関わろうとするわたしを呼んでこの話を聞かせてくれたのだと思った。父たちの世代が亡くなれば、足尾を自分の目で見た人たちはいなくなる。

亡くなった方が教えてくれること、亡き魂を受け入れる場所、そういったものに大きな感謝と宇宙的なスケールの大きさのようなものを感じるようになった。

一方で、亡くなった者の魂の行き場もないような世界は、生きている者の行き場もない世界、のように見え、胸がキリキリとする。生きていても、死んでいても、そこに居てもいいよ、というような、だれかと共に在るような場所があればと思う。



兄弟

故郷を想いだす
三角公園の
夏の夜
蜻蛉

竹天う
かどに
福がくる

今年は縁があって神輿と精霊棚（しょうりょうだな）を作る機会があったのでそれについて書かせていただくことになった。神輿はご存知の方も多いと思うが、精霊棚について少しだけ説明を書かせていただくと、精霊棚・盆棚は日本の習俗的行事、お盆に先祖、精霊を迎える棚のことである。ゴザの上に胡瓜や茄子に4本の割り箸を刺し、足にして立て、動物を模したものを何処かしてみたことがあれば、それを想像してもらおうとよい。簡単にではあるが、どのような日程、工程だったのか紹介させていただきたい。

8月2日、とある作家のワークショップ。釜ヶ崎の子どもたちがプラダン（プラスチックダンボール）製のブロックに絵を描き、テープ、モール、玩具や鈴など飾り付けた。

8月11日、神輿の仕上げ作業。アルミ製の脚立を上げてまっすぐにし、その上にプラダンブロックを四方の壁面に窓を開けて四角形に組み、その中心に釜を、神輿の上には端材を使って作った鳳凰を据えた。

8月12日、釜ヶ崎の夏祭り前夜祭当日。子供たちが神輿を担ぎ、楽隊の演奏とともに街を練り歩いた。その後、神輿を解体し、プラダンを箱に詰めた。これは横浜に送られ形を変え展示に使われるそうだ。

8月15日、旧盆の日。カマン！メディアセンターの入り口あたりに精霊棚を模し、半畳のユニット畳の四隅に笹を挿したハートランドのビール瓶を置き、中央には神輿に乗せた釜を据えた。位牌を模したものの中に紙粘土で作った人形とLEDの球体の電灯を、胡瓜の馬と茄子の牛の代わりに神輿の上に乗せていた鳳凰を配置した。あとは来た人たちが、招き猫、踊る猫人形、皿と箸、水の入ったコップ、缶コーヒーなどを置いてくれた。

プラダンブロックを飾る子供たちと過ごしながら幸せを感じ、神輿を作りながら担ぐ人や見る人が楽しんでくれることを想い、街を練り歩きながらこの道の上を通り過ぎていく、通り過ぎていった人を想い、釜を指差して笑ってくれたこどもやおっちゃん、街の人たちに感謝した。神輿や精霊棚はきっかけであり、その形の先にあるもの、出逢った人、出逢えなかった人を想うことに意味があると思っている。日々の中で、季節、風景、物を見て、誰かを、何か想い、感じる事ができたなら、その瞬間を大事にしたい。



いやあ、とても面白かったです。江戸時代に流行った大阪庶民の「都市文化」ってほとんど知らなかったの。それにしても、里帰りとか家族的行事が多いお盆の時期に、自分とは無縁の「墓参り」をなんと集団ですするというのはとても新鮮でしたし、それが、江戸時代の大阪という大都会にあったということが驚きで発見でしたね。

大阪市の繁華街の施設に埋没してしまっている 7 つの墓地ですが、当時は、大阪市街に入るところ、市内からすると「縁辺 / 辺境＝はずれ」にあたる場所であることも素直に驚きです。梅田（埋田）墓地、千日（前）墓地は大阪のキタとミナミの中心であるの言うに及ばず、南濱墓地（中崎町）、葎原墓地（天六）、蒲生墓地（京橋）も今はほんとに夜も明るい場所でした。そして、いまでもディープサウスという辺境感のある飛田（鳶田）墓地。これらを探るりと歩いて巡る（舟も活用されていたそうです！）には、半日近くもかかる距離なのですが、現在は大阪環状線を使えばすぐだということも、昔と今の都市機能が交通手段と大きく関わっていることを実感することもできました。

さらに、リアルには知らない人たちのツアーに参加させていただいたのはとても愉快で知的なものでした。私もそうですが、facebook での参加予約が結構あったそうで、まちの魅力探しツアーって、ソーシャルメディアがとても役立ってきているのだなあとこの発見もさせていただきました（募集定員は 20 名ほどのところ、1.5 倍以上でしたね）。演劇関係の方（東京在住）に会ったり、娘の知り合いに挨拶していただいたり。そうそう、1999 年に精華小劇場コトハジメという企画をしたのですが、それに参加していただいた方が 2 名もいらっしゃるといっても、何かのご縁だなあと感じた次第でした。

150 年以上前のこの墓めぐりでは、全く知らない人たちが一緒に巡ったのではないかも知れませんが、やはり、血縁とか狭い地縁とは離れた、知り合いだとしても、遊び仲間とか、趣味などが同じとかそういうゆるい縁（選択縁）の人たちだったような気がします。

自分が所属する家族のお盆の（送り火とか精霊流しとかの）行事をしたあとにこの墓めぐりメンバーになった人もいるでしょう。でも、農村などから大阪に出て、大阪では墓参りをする場所がない人たち（無縁者）のつながりづくり（ソーシャルツアー＝社交遊戯）でもあったように今回歩きながら想像しました。若者たちにとっては、本音は夜明けまで遊び倒すことだとしても、この七墓参りが宗教的行事としてもあることで社会的規律の範囲内にあったのかも知れません（たぶん、鉦や太鼓も持っていますが、数珠や線香、ロウソク、お経の本なども持参していたはずです）。

「七」という数も鍵ですね。七福神に七草がゆ、七

五三にお七夜・・セットの縁起のいい区切りの数字として「七」はいい数なのでしょう。蒲生墓地に六地藏がありましたが、六つとか、八つ（八つ墓村っていうのも、墓つながりて連想しますね）とか、なにせ、六つ以上は「多い」ということで、ある種のお手軽なお得感、あるいは、多いことで、特定の集団や派閥とかそういう狭い世間を越える「間一地」としての都市的浮遊感があるように思えました。

150 年前の大阪を想像するのは楽しくまた難しいものです。晴れていたなら、満月であったのは確かですね。だから、少しは明るい。でも、提灯などをもってこないと暗がりはかなり危険な感じはします。陸はいまよりも少なく、湿地や川、堀がいたるところにあり、交通の手段は舟がけっこう使われていた・・・旧暦の 7 月 15 日あるいは 16 日。その夕方、月が東の空に昇るころ、どこからかしら集まってくる男女。どんな人かなあ。夜目遠目っていうなあ。月下美人っていうのもそれだけ？

どこにまず集まったのかなあ。ツアー企画も当番の才覚でしょうね。やはり、堀とか舟とかの交通の便が決め手かな。あるいは、最後は遊郭があるところかな。7 つも墓地を回っていけば、そのうちに、若い男女のカップルなら途中で自主的行動になるわけで、また、合コンツアーもかねていたかも知れないので、出逢いがあったカップルはいつしかいなくなり・・最後まで残った連中は精進落としをするのかも。今回のツアーについて、重ねてよかったことを書いて終わりにしたいと思います。

まず、案内人の方々が実に淡々と歩いていく形をとられたこと。大人のツアーでした。事前に研究されているからこそ、こんなむずかしいルートを辿ることができたのだらうと思います。研究よりも実践が大事というところもよかったし、古いものの復活ということだけではない可能性がいっぱい感じられたことも素敵なことだと思いました。

さらに、これは、僕の研究実践用語でいけば、現代の限界芸術を企画されているということになるので、また、鶴見俊輔さんが言い出した限界芸術論のことはまた別に考える機会があるかも知れませんが、そこで、デモとか葬列、墓参りが演劇的領域における限界芸術ととらえられていて、観光ツアーが、こんな素敵なツーリズムになるのなら、限界芸術論と接合できるなあという確認が出来たことも僕にとっては望外の喜びでした。

最後になりましたが、笛を奉納されている女性がいらっちゃって、回向として何ともいえない妙味でした。演奏会でない音楽聴取の経験の幅を広げること、それを、墓地というところで回向という形で思いがけなく教えてもらえた！というのも嬉しかったことの 1 つです。

EVENT PICK UP



ココルーム、カマン!メディアセンター、こころぎでは、日々さまざまなゆるやかなイベント・勉強会・相談会がおこなわれています。お気軽にご参加ください。くわしくは、<http://www.cocoroom.org> をご覧ください。

釜ヶ崎句会

月に一回、みんなで集まって楽しく俳句をつくっています。正式な句会のやりかたにのっとり、投句、選句、披講とすすめ、最後には暢春先生(俳人・能面師)による選評があります。つくった俳句は、滋賀県近江八幡市の俳句結社・氷志会(ひょうしかい)の選句の対象にもなります。

2011年8月の作品の一部を紹介します

玉葱とゴーヤが競う サラダかな (忠)
 晩夏さえ 笑える若さ 懐かしむ (恵)
 ヒグラシの 木立ちを眺め 舟一艘 (わむ)
 しょうろさん わがやの棚に いつ寄るや (わむ)
 新蕎麦や かぐのし御膳 花咲かす (ユミコ)
 なつまつり 人がいつぱい たのしいな (小春)
 北の檣 せめてこころに 大文字 (かなよ)
 涼新たに 病治りて 前進だ (心登)
 ひまわりが おれはすきだよ 釜暮らし (心登)
 向日葵の 咲きける空に 雲流る (秋葉忠太郎)
 ヒグラシも らかんに会って 時とめる (みちのく)
 秋立つや こうげんにさく そばの花 (こて)

健康おしゃべり相談会

カマン!メディアセンターの縁側で、看護師さんとお口と歯の専門家が健康相談をしてくれます(無料)。ちょっとした健康の相談、血圧の測定、虫歯・歯磨きのことなど、おしゃべり感覚で相談しませんか?。歯磨きが変わりますよー。

毎月第三水曜日 午後2時~午後3時

2011年予定

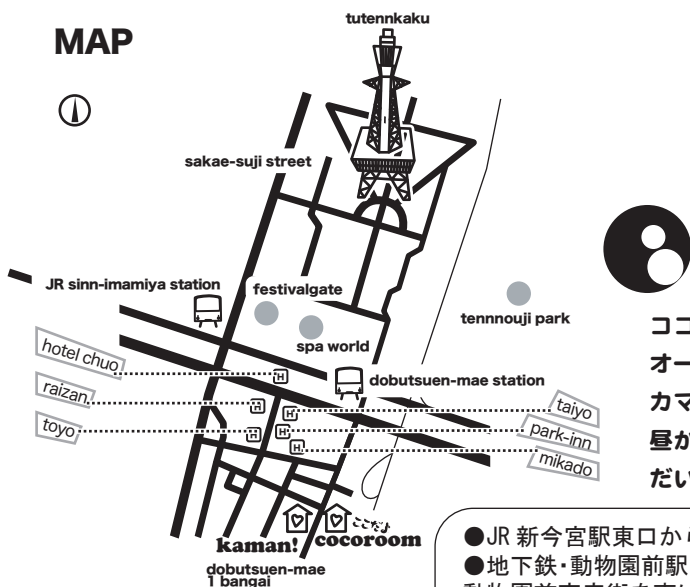
(9月21日、10月19日、11月16日、12月21日)

えんがわ茶屋・こころぎ

大阪市西成区萩之茶屋にある「支援ハウス路木」の一階に「えんがわ茶屋・こころぎ」ができました。支援ハウスとは、単身高齢者が安心して暮らすことができるための共同住宅。その一階にある「えんがわ茶屋・こころぎ」では、居住者の方々がくつろいだり会話を楽しんだりできる交流スペースづくりをすすめています。月・水・金の週に3回(朝8時30分~お昼頃まで)、モーニング喫茶を営業しているほか(ドリンク100円~)、小さなイベントも企画しています。イベントは基本的に支援ハウスの居住者を対象としていますが、「えんがわ茶屋・こころぎ」は街に開かれた場となることを目指しており、みなさまのご参加もお待ちしております。特に、人と会話することが好きな方、社会福祉に関心がある方、釜ヶ崎の街でボランティア活動してみたい方は大歓迎です。詳細につきましては、ココルーム(06-6636-1612)までお問い合わせください。

557-0004 大阪市西成区萩之茶屋2丁目7-7
支援ハウス路木1階
(萩之茶屋小学校近く、ココルームより徒歩10分)

MAP



ココルームは「参加型カフェ」となっています。

オープンはおよそ10:00~19:00ころ。

カマン!は

昼から19:00ころです。

だいたい毎日ひらいています。

■ココルームでは、活動のための寄付をつのっています。

三井住友銀行 天王寺駅前支店 普通1585265
トクティエイリカツドウホウジンコトバトココロハヤ

郵便振替 記号01090-5-48059
ココルーム



特定非営利活動法人こえとことばとこころの部屋(ココルーム)
Non-profit organization The Room for Full of Voice, Words, and Hearts (Cocoroom)

インフォショップ・カフェ ココルーム

557-0001 大阪市西成区山王 1-15-11

tel&fax.06-6636-1612(+81)

info@cocoroom.org

<http://www.cocoroom.org>

The Information Shop & Cafe COCOROOM

1-15-11 Sannoh, Nishinari-ku, Osaka, JAPAN 557-0001

カマン!メディアセンター

557-0002 大阪市西成区太子 1-11-6

info@kama-media.org

<http://www.kama-media.org>

KAMAN! Media Center

1-11-6 Taishi, Nishinari-ku, Osaka, JAPAN 557-0002